

私の英語史

田崎清忠

日本放送出版協会

まえがき

テレビの仕事をはじめてかれこれ12年。ラジオ英語会話の松本亨先生が21年というから年数からいえばやっと半分。松本先生のお仕事の大きさが、自分の経験を通して理解できるきょうこのごろである。

さて、テレビの番組づくりのむずかしさは、不特定多数といういわばとらえどころのない相手に対して何がしかの教育内容を構成し伝達することにある。しかも学校放送番組や通信高校講座番組のようにある程度受け手ははっきりしているものとくらべると、この不特定多数という代物はまったくつかみどころがない。そこでNHKの担当者や講師は、視聴者から送られてくる投書をパロメーターのひとつにえらぶ。「むずかしすぎる」「やさしすぎる」「おもしろくない」「ああせよ」「こうせよ」というヤツギ早やの注文を冷静に分析し、受け手のもつ最大公約数的希望を考慮し、講師のもつ教育観や理論、それにNHKのもつ技術的可能性や予算にもとづいて番組作りを進める、ということになる。

投書の内容はまさに千差万別で、これをまとめておいて印刷したら、楽しい本がいつでき上がるのではないかと思われるほどである。小学校の1年生が、たどたどしいひらがなで、「きょうは『へろー』をならった。『へろー』というのはどういう意味ですか」などと奇妙な手紙を送っ

てくるかと思うと、「私は母と口論をしました。どちらが正しいか判断してください」などという家庭の事情的便せんもはいつてくる。家出の相談があるかと思えば、就職や留学の斡旋を求めるもの、はては夫婦げんかのあとしまつから恋愛問題までくる。「英語をべんきょうしたい。だからセンセイの家の女中にしてください」なんてのがあるかと思うと、「やっと親を説得しました。これから先生と結婚するために上京します」などという恐怖のたよりもある。私が髪を七三に分けていないことを怒っている投書もあるし、テレビでならった通りの英語を答案に書いたら試験で先生にバツをつけられたとの苦情もある。ネクタイがまがっているというご注意もあるし、へたくそな芝居はヤメロ！ というものもある。そしてそれらのおたよりのどれもこれもみんな理由があって真剣なものである。だからいちいち返事を書く。「センセイから返事などこないと思っていたらハガキがきたので、これから毎週手紙を出します」などという中学生も出てくる。考えてみればありがたいことである…もし番組に対して何の反応もなかったら、さぞ頼りないことだろう…と思うのである。

投書の中で私をいちばん困らせるのは、ハガキに大きな字で1行「英会話のべんきょうのしかたをくわしく教えてください」と書いてあるものである。投書の主は1行ですむが、私はたいへんな仕事を与えられたことになる。しかもおなじことを何回も何回もちがった相手に書かなければならない。またこれとよく似た類型化された質問に、「センセイがどうやって英会話をべんきょうしたのか教えてください

ださい」というのがある。これも返事を書くのがたいへんだ。何とか時間を見つけて返事を書くと、また次の週には似たような内容の手紙が何通か届く。これではヤリキレない。考えた結果放送出版協会のテキスト編集部と相談して、1970年の4月号のテキストから「私の英語史」という題で随筆的履歴書を書きはじめた。

書きはじめるとすぐまた投書がきた。

大阪のAさん——センセイも特殊な人ではないと知ってホッとしました。

札幌のBさん——同時代に育った私は、英語の話よりも、その背景の記述をなつかしく思い出しています。

仙台のCさん——わたしもその通りを実行してみたいので、なるべくくわしく書いてください。

徳島のDさん——貴殿の個人的回想談はテキストにとって無用のもの。早くおやめくださるよう。

ヤレヤレ…と思う。Dさんのようなご意見もさぞかしあることだろうと予想していたからである。

「私もほんとうはどちらかといえば書きたくないのです」と私は返事を書いた。

「何かほかによい方法があったら教えてください」

Dさんから「よい方法」についての提案はきずじまいであった。

「私の英語史」は自叙伝ではない。私は自叙伝を書くほど年をとっていないし、偉い人だとも思っていない。それほど自意識過剰じゃないし、立志伝中の人でもない。おだて

られるとノボセル傾向はあっても、よろこび勇んでペンを握るほど過度ではない。「センセイはどうやって英語をべんきょうしたんですか」という手紙にいちいち返事を書かずにすます方法は…と考えた結果思いついた窮余の一策的本である。「ああ、これで返事を書かずにすむワイ」とほくそ笑んでいるある怠け者の作品(?)である。